

(別紙様式3)

平成29年 3月31日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都小平市たかの台2番1号  
管理機関名 学校法人 創価学園  
代表者名 理事長 原田 光治 印

平成28年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成28年 6月 1日(契約締結日)～平成29年 3月31日

#### 2 指定校名

学校名 関西創価高等学校  
学校長名 中西 均

#### 3 研究開発名

TRY 人(じん)の郷・交野から  
平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム

#### 4 研究開発概要

関西創価高校がSGHを通して生徒に身につけさせたい力は、国連の提起する地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」である。Active Learningの土台の上に、全校生徒を対象とした「環境・開発・人権・平和」の4分野について学ぶ探究型総合学習GRIT(Global Research and Inquiry Time)やGlobal Citizenship Seminar、希望者を対象とした知的好奇心を高揚させる高大連携プログラムのUP(University Partnership)Class、希望者から選抜された生徒がオールイングリッシュで徹底した探究を行うLC(Learning Cluster)で、確かな知識と広い教養の涵養を目指す「世界市民教育」の教育課程を高大連携して研究開発する。



- Global Citizenship Seminar として外部講師を招いての講演を4回行った。
- GRIT Field Work として7月に東京20名、8月に広島24名、3月に東北20名でのField Work を一般公募で募集し行った。
- SOKA Progress Class については、University Partnership (通称UP)Class を開設し、大学などから講師を招き地球的課題の基礎講座を開催した。Advanced English & Math Class は継続して実施。どの講座も生徒から高い評価を得た。
- Learning Cluster については、高校2,3年生より24名と、3年生のアドバイザー2名の合計26名を選抜し、Field Work in Tokyo、Field Work in America を実施。年間を通して英語での探究が進み、高校生による平和への提言「Peace Proposal」を完成させた。
- Active Learning についてはSGH提携校である創価大学教授による教員対象の校内研修を2回実施、研究授業ウィークを2回開催、外部セミナー等への参加等行い、「環境・開発・人権・平和」を各教科でもトピックに取り上げた。その結果、SGHに繋がる授業改善が推進された。また、全教員の93%の教員が授業でActive Learning に挑戦するなど、全教科に渡って大きく進展した。
- Newspaper in Education については、年間通して各クラスで取り組み、コンクールでも入賞者が出た。また校内で全校生徒に対する「アメリカ大統領選」などのトピックでのアンケート調査を行うなど、活発に活動した。
- Feel Japan Program については、ほぼ例年通りの計画通で進んだ。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

○SGHA時代を含めて3年目となり、GRITのカリキュラムの流れを精査し、3年間で完成する内容へと変更した。1年次は「グローバルイシューとの出会い」をテーマに、知識のインプットとディスカッションを中心としたプログラム、2年次は「グローバルイシューとの戦い」をテーマに、「環境・開発・人権・平和」の4分野からトピックを選んで探究活動を行い、それぞれのチームが大学教授に探究成果と提言を発表、3年次は「世界を一つにする力」をテーマに、合意形成の力を培った。

その集大成として、3年生全員、92ヶ国で取り組んだ模擬国連では「飢餓の終息に向けた農業分野での国際協力」について総会を開催。採択された二つの決議を元国連事務次長のチョウドリ大使に提出、全員が探究したことを論文にまとめ、英語サマリーとして発信した。チョウドリ大使からは、素晴らしい取り組みと成果であるとお褒めの言葉をいただくとともに、「国連憲章の精神」をさらに深めてほしいことと、「国連は完璧ではない」ことを踏まえて、取り組んでほしいとのアドバイスをいただいた。

アンケートで「世界の食糧事情について関心がありますか」が入学前42%から87%、「国際的な合意形成の難しさを知っていますか」については入学前22%から74%に変化するなど、大きく変容した。考えや知識量が変わったきっかけとして80%の生徒がGRITによる取り組みをあげ、その理由として「相手に対する共感力が増した」「多様性を認める心が芽生えた」「他国で起こることも自分と関係がある」「協力すれば道は開けることを知った」「苦しむ人を救いたい」などと答え、多くのグローバルリーダーとしての心を育んだと考えられる。

○生徒の意識の変容は各種のコンクールや大会にも表れた。Newspaper in Education では学校奨励賞を受賞、JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストでも学校賞を受賞するなど、多くの生徒が自主的に参加活躍し、多くの受賞者も輩出した。

○模擬国連部の2名が全国大会で優秀賞を受賞し5月に米国国連協会主催の国際大会に出場。日本代表として活躍した。

○米国ミドルベリー大学院モンレー校大量破壊兵器不拡散研究所での「日米露の高校生による核不拡散教育会議」(CIF)に2名が参加、ペリー元米国務長官の前でプレゼンテーションを行い高い評価を受けた。

○Learning Cluster については、Field Work in America において元国連事務次長のチョウドリ大使とのセッションや、核時代平和財団のデビッド・クリーガー博士とのセッションなど充実したものとなった。また、各チームがそれぞれのトピックを探究したものや解決策の提言をプレゼンテーションし、高い評価とアドバイスを受けた。

○第33回「私の自然観察路コンクール」において1年生が最高賞である環境大臣賞を受賞。

○University Partnership Class を受講した生徒は、「自分自身が成長した、視野が広がったと感じる」との問いに、97%が「視野が広がったと感じる」と答え、「物事をいろいろな角度から見たり、考えたりするようになるようになったと感じる」との問いには、受講した生徒の100%が「できるようになったと感じる」と答えるなど大きな成果を上げた。

○「海外で通用する語学力は必要であると思いますか」の質問に97%の生徒が「必要」と答え、語学に対する意欲が大きく高まった。それを受け、英検の受験者が全校生徒の約半数を超え、その結果、昨年と比較すると1級が1名から4名、準1級が10名から45名に、2級が175名から287名へと大きく飛躍した。

○第9回「漢語橋」世界中高生中国語コンテストにおいて、1年生と3年生の生徒が特等賞及び最優秀賞を受賞し国際大会へ参加、中学で行われた国際大会において3年生の生徒が優秀賞を受賞した。

○「世界津波の日」高校サミット in 黒潮に高校1年生が3名参加。日本を含む世界30カ国、361名の生徒とともに調査を行い、プレゼンテーションを作成。その模様はYouTubeにもLIVE配信され、本校生徒が代表となり英語で発表した。

○世界に興味を持ち、多くの生徒が海外に旅立った。世界大会ならびにSGHとしてのフィールドワークで28名、文科省の「トビタテ留学 JAPAN」などを含む個人留学で34名、合計62名がこの1年間で海外に実際に足を運び探究活動を行った。

○GRITの取り組みについて、教員に対するアンケートで「本校のGRITプログラムは、国連が提起する地球的課題の探究に取り組む内容になっていますか」の問いに100%の教員が「よくできている」「たいへんによくできている」と答え、「SGHの諸活動は、自分の授業や生徒に対する指導法・内容に影響を与えましたか」の問いには、81%の教員が「影響を与えた」と答えるなど、教師が一丸となって取り組み、さらに教師も生徒とともに成長することができた。

○運営指導委員会を3回開催し、昨年に比べても「大きく発展している」とのお言葉をいただいた、ユネスコスクールの申請も終え、IB(国際バカロレア)についても多くの

教員が研修会に参加するなど、教員の意識が大きく向上した。

○高校3年生の模擬国連では、大学院生TAによるアドバイスやJICA 関西によるアドバイスなど、国内にいても世界を感じる取り組みができた。

<添付資料>目標設定シート

8 次年度以降の課題及び改善点

○GRITは全員を対象としているが、さらに満足度を上げる必要がある。あくまでも100%の生徒がGRITを学ぶことに意義を感じ、積極的に取り組めるよう、内容の精査と時間配分の工夫をさらに行う。生徒の変容にこだわり、変容の要因となる心の変化にまでこだわるプログラムとしたい。

○SGHプログラムを柱とするのは当然として、生徒が持った興味・関心をさらに深めるために、各教科においての世界的課題への内容を盛り込んでいきたい。(仮称GRIT 地理、GRIT 保健など)

○生徒が学んで感じた、さまざまな興味関心を、生徒たち自身は時にはクリティカルに考え、時にはロジカルに考えてまとめ、発表できるプログラムの開発に着手したい。(言語技術等)

○学びの部分での探究や、知識は深まったが、実際に地域に参加して取り組むプログラムや、社会で体験するプログラムが弱いと感じる。本校生徒はクラブ活動の参加率が90%であり、学校の諸行事などの活動も盛んなため、活動時間の制約があるのも課題である。生徒の負担を少なく、なおかつ多くの生徒が積極的に活動できるプログラムの開発を目指す。

○交野という自分たちの地域から発信するプログラム、地域の学生や住民の方と開発するプログラムを増やしたい。

○明年度はSGHスタッフも採用するので、さらに充実の取り組みをしていく。

【担当者】

担当課	経理募金課	TEL	072-891-0011(代)
氏名	富田 伸彦	FAX	072-891-0015
職名	主任	e-mail	tomita@soka.ed.jp